

題目 『The Bodily Incorruptibility of Holy Men and Women in Pre-Modern Japan and Europe』

「腐敗せざる遺体ー前近代日本と欧州における聖人の遺体をめぐって」

目次の日本語訳

はじめに

序章

第一章： 腐敗せざる肉体に関する理論的考察

- i. コンストラクティヴィズムの諸観点
- ii. 腐敗せざる肉体、像と一体性

第二章： 弘法大師入定説について

- i. 『日本霊異記』と弘法大師入定説以前における腐敗せざる遺体をめぐる思想
- ii. 弘法大師入定説と浄土教思想
- iii. 弘法大師入定説と神仙譚

第三章： 前近代日本と欧州における聖なる男女の遺体が腐敗しないこと

- i. カトリック聖人の *Corpora Incorrupta* の思想史
- ii. ミイラと聖人信仰をめぐる日本と欧州の比較文化論的研究

結語

文献一覧

本研究の問題関心は、日本列島をフィールドとして、そこで作成された聖人伝の思想内容を分析するとともに、それをヨーロッパの聖人信仰と比較研究することである。すなわち、日本仏教のいくつかの宗教思潮について、各時代と文化圏の資料を分析するものであり、本質的に比較研究である。主な論点は、弘法大師入定説と、そこに影響を与えたと考えられる浄土教の思想およびその聖人伝に関する問題、さらに西ヨーロッパと日本においてともに聖なる遺体が腐敗しないとされていることから生じる問題について追求することである。先行研究において、日本とヨーロッパにおけるミイラの思想史に関する理論的な考察は十分であるとは言い難く、したがって本論は聖なる人のミイラ、または

その比較研究をめぐる「理論」を示す試みである。

本研究では、日本において遺体が腐敗しないことから生じる特別な聖人観とその遺体の役割が、西ヨーロッパの聖人の場合にも同様に見られることを議論する。そのことから、遺体が腐敗しないことの一般的な宗教的意義についても考察する。その際、比較文化論的な視点に立脚しつつ、以上の問題を探求することによって、前近代思想における「浄と不浄」、「あの世とこの世」等の死生観に関わる重要な研究の一助となることを目指したい。

序章では問題の所在を示し、先行研究を概観する。第一章 (i) の目的は、コンストラクティヴィズムが提供する学際的文脈の中で、比較研究の妥当性を検証することにある。宗教学におけるこれまでの比較研究の失敗と再考の歴史を踏まえながら、比較研究のあり方を批判的に検討する。ここでは特に、宗教学者のジョナサン・Z・スミス氏の方法論に着目し、比較研究のより広範な可能性について論ずる。コンストラクティヴィズムにおける規範変容の理論に焦点を当て、国際関係論と社会科学における比較研究の適応可能な事例を提供する。

第一章 (ii) では、ミイラ化した聖なる人に関する文化史的な文脈において有用な「受容理論」を紹介する。本論では、前近代日本およびその他の資料を参考にしながら、「混合的内容」(syncretic content) という概念と「ミメティック理論」(mimetic theory) の妥当性について議論する。

第二章は日本における聖なる人の遺体が腐敗しないことのパラダイムである弘法大師入定説伝説を再考する。空海が永遠に高野山の奥の院に留まることを語る弘法大師入定説伝説は、従来密教の即身成仏の思想、あるいは弥勒下生信仰との関わりにおいて解釈されてきた。それに対し本章は、この問題に関する近年の研究を踏まえ、この伝説が高野山復興運動を背景として、一〇・一一世紀の浄土教的聖人伝=往生伝の思想と密接な関わりをもち、その影響を受けて成立したものであることを、広範な文脈のなかで論証しようとするものである。さらに、それ以降の弘法大師入定説の成立と発展を、同時代のより広範な思想的文脈の中に位置づけることを試みる。すなわち本稿は、弘法大師入定説における即身成仏の意義や、腐敗せざる聖なる遺体に関する筆者の研究の一環を成すものであり、先の研究の結論をさらに発展させることを目的とするものである。

この第二章は『日本霊異記』と弘法大師入定説以前における腐敗せざる遺体をめぐる思想の考察 (i) で始まる。日本における遺体の状態に死後の運命が表されているという概念は、古代後期の資料に限られたものではない。本節では、『日本霊異記』が表している、古代における体に現れる死後の状態の印を描写する資料を紹介する。第二章 (ii) は、弘法大師入定説の関連資料の分析と比較考察に主眼を置きつつ、往生伝文学が弘法大師入定説に与えた影響やその思想史的背景などについて考察したものである。第二章 (iii) では、一一世紀後

半から十二世紀前半の時期に、弘法大師入定説が神仙譚に類似する形式で描写され、説話集などに収録されたが、弘法大師入定説を真言宗における即身成仏思想の枠の中で理解しようとする通説の影響で、その意義はいまだ十分に注目されていないことを論じる。

第三章 (i) は、ヨーロッパの聖人伝 (*vitae*) における *corpora incorrupta* (腐敗せざる肉体) の観念を、広い文化史の文脈の中に位置づけようとする試みである。

ヨーロッパ中世においては、遺体の肉が完全に腐敗して骸骨になるまでの間は、遺体は危険で不安定な存在だと捉えられていた。生きている人々が、罪深い人物の遺体により損なわれる恐れがあった。悪人の遺体が危険であるのとは逆に、聖人の遺体は非常に縁起がいいものと見なされていた。聖人の *corpora incorrupta* は、もともと聖なる肉を有する存在と信じられた。しかし、その肉と聖人の *ratio* (理性的精神) の関係が密接であったがために、逆に *corpora incorrupta* の *anima* (魂) と *caro* (肉) をめぐる教義的説明は不明確なものにならざるをえなかった。宗教改革へと向かうヨーロッパにおいては、その不明瞭さが *corpora incorrupta* の一つの魅力的な側面であったが、より詳しく検討すると、神聖性の印として説教的な意義を持っていた古代の *corpora incorrupta* は、中世的身体論によってより理論的に解釈されるようになっていたことがわかる。

第三章 (ii) では西ヨーロッパにおける聖人と日本における往生人を比較考察する。「浄と不浄」、「あの世とこの世」というテーマに主眼を置き、特に『往生伝』と『黄金伝説』の資料を取り上げる。その資料における聖なる死の思想的文脈と意義について論じ、さらにその比較研究へのアプローチを紹介する。日本に現存している「即身仏」の中で最も古いものと言える弘智法印資料を展望的に、近世日本における腐敗せざる遺体を考察する。即身仏に関する文献資料は非常に乏しいが、弘智法印の場合には、先行研究でほとんど注目されてこなかった『弘智法印御伝記』という江戸期の人気を集めた浄瑠璃等がある。本節は近世ヨーロッパの世俗化している社会との比較を含めた、当該資料をめぐるとの一考察である。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	モリス・ジョナサン・ポール
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤 弘夫 教授 鈴木 岩弓 准教授 片岡 龍
論文名	The Bodily Incorruptibility of Holy Men and Women in Pre-Modern Japan and Europe
<p>本論文は、日本列島をフィールドとして、そこで作成された弘法大師などの聖人伝の思想内容を分析するとともに、欧州までを視野に入れた広い歴史的・文化的なコンテキストのなかで、日本の聖人信仰の特質を明らかにしようとしたものである。西欧と日本において、いずれにも「聖なる遺体は腐敗しない」という言説が見られることに着目し、そのテーマについて、資料に即して両地域の比較考察を試みるとともに、その研究を理論や方法のレベルでも練磨していくことを目指したものである。</p> <p>序章では、上述の問題意識と具体的なアプローチの方法が詳述されるとともに、本論文の内容に関わる研究史が示される。</p> <p>第1章「腐敗せざる肉体に関する理論的考察」では、主として視座や概念、方法論の問題が論じられる。「constructivism」「mimetic theory」など、本研究に関わる方法論が紹介されるとともに、聖人信仰及びその比較研究に果たすその有用性が論じられる。</p> <p>第2章「弘法大師入定説について」では、空海が高野山の奥の院で永遠に瞑想にふけっているとする弘法大師入定伝説の成立と展開が取り上げられる。</p> <p>従来、密教の即身成仏の思想、あるいは弥勒下生信仰との関わりで解釈されてきたこの伝説を、高野山復興運動を背景として、浄土教的聖人伝＝往生伝に思想の影響を受けて成立したものであるとする。また、弘法大師入定説が11世紀後半から神仙譚に類似する形式で描写されるようになることを指摘するとともに、この時期、往生者から救済者へと、空海のイメージの変容がみられることを明らかにしている。</p> <p>第3章「前近代日本と欧州における聖なる男女の遺体が腐敗しないこと」では、古代から中世への転換期のヨーロッパにおいて、「腐敗せざる肉体」に対する解釈が大きく転換することを論ずる。さらに、『往生伝』『黄金伝説』『弘智法印御伝記』などを素材として、宗教改革を挟んだ二つの時代の日本と西欧の聖人信仰の実態を比較考察することによって、それぞれの特色を浮き彫りにしようを試みている。</p> <p>本論文は、論証の堅実さ、叙述の明晰さなどに若干の課題は残すものの、研究のスケールは大きく、個々の実証においても通説を覆す斬新な知見が提示されている。本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	